第63回全国小学校社会科研究協議会研究大会 群馬大会プレ大会 研究の内容

大会主題 よりよい社会を創造する児童を育てる社会科学習
副 主 題 ～思考力、判断力、表現力等を高め、社会参画意識を育てる学習の充実～

Ⅰ 主題設定の理由

(1)社会背景

人口知能(AI)、ビッグデータ、Internet of Things(IoT)、ロボティクス等の先端技術が高度化して、あらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつあり、社会の在り方そのものがこれまでとは「非連続」と言えるほど劇的に変わる状況が生じつつある。

このように急激に変化する時代の中で、我が国の学校教育には、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の作り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。これは学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であり、その中で**「公民としての資質・能力の基礎」**を育成する社会科の役割は大きい。

児童は、少子化・人口減少、地球規模課題など様々な社会課題があり、先行きが不透明で将来の予測が困難な時代を生きていく。新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響、及びロシアのウクライナ侵攻による国際情勢の不安定化は、まさに予測困難な時代を象徴する事態であったといえる。中央教育審議会答申では次期計画のコンセプトとして「持続可能な社会の作り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げている。そこで、**様々な社会課題の解決に関わり、多くの人々の幸せのために「よりよい社会」を考え続ける未来志向の児童の姿**を、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な資質・能力の基礎」である「公民としての資質・能力の基礎」を身に付けた姿とし、**「よりよい社会を創造する児童」**として本大会の研究主題に掲げることとした。

(2)群馬県小社研の研究のあゆみ

本県は平成13年に第39回全国小学校社会科研究協議会研究大会を行い、それ以後も研究主題「社会的事象を実感的にとらえ、よりよい社会を考えようとする社会科学習」、副主題「思考力・判断力・表現力を高め、お互いの考えを深める学習の充実」として研究を進めてきた。毎年、研究校による発表と、県内各地の代表者による実践の紹介を行う社会科研究協議会を開催し、研究を推進してきた。社会背景を鑑み、研究主題の刷新を図り、令和5年度より本大会主題を群馬県小社研の研究主題として研究を続けてきた。

Ⅱ 大会主題について

「よりよい社会」とは、**「持続可能かつ多くの人が生きやすく、より生活しやすい社会」**と定義する。児童が生活している社会は、社会科の学習における社会的事象そのものである。学習の対象とした社会的事象を通して、自分たちの生活している社会に対する愛情をもてるようにすること、より生活しやすい社会をつくって

いこうとする態度を育成することが社会科では求められている。

「創造する」とは、「社会の一員としての自覚をもち、自らが社会と関わりながら見いだした問題に対して、解決する方法を考え続けようとすること」と定義する。社会の問題に気付くためには自分と社会とのつながりを感じながら、様々な社会的事象への関心をもったり、社会の問題を解決するために自分の考えをもち、他者と協働的に問題解決を図ろうとしたりすることなどが求められる。

Ⅲ 大会副主題について

「よりよい社会を創造する」ためには用語や語句などの個別の事実等に関する知識を得るだけでは不十分である。「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの資質・能力が相互に関連し合いながら、概念的知識の形成を図る必要がある。

群馬県の小学校では、令和5年度全国学力・学習状況調査結果において、国語では、「複数の資料を用いて自分の考えを書く」など、書く領域での課題が見られた。算数では、「図形の性質を活用して数値を求めたり、大小関係を判断したりする」など、「思考・判断・表現」に関わる設問で課題が見られた。国語と算数の両方で「思考力・判断力・表現力等」の観点における課題があることが明らかになった。これは、社会科においても同様の傾向があり、群馬県では、平成24年より「ぐんまの子どもに伸ばしたい資質・能力」として「**比較・関連付けて考え、社会的事象の特色や意味を理解すること**」「**社会生活や現代社会の課題とその解決策を考えること**」などが具体的な課題として挙げられ、資質・能力を伸ばすための授業改善が継続的に取り組まれてきた。また、令和6年度から取り組まれている群馬県教育ビジョン（第4期群馬県教育振興基本計画）では、「目指す学習者像実現のための5つの重点政策」の中に「自分と社会をより豊かにするための生涯にわたる学びの支援」が掲げられた。その主なテーマとして「主体的に社会の形成に参画する態度の育成」を推進することが求められている。

社会科は現在・過去の社会的事象を扱うことが多い。教師から社会的事象について説明されるだけであれば、児童は「そうなのか」「ふーん」と思考が停止してしまう。こうした授業が展開されていくと、社会科は受動的で暗記が多いという印象が強くなる。そうなると児童が主体的に学ぼうとする姿勢も弱くなってしまう。そこで社会的事象と自らの生活との関連を基に「考える」社会科の実践が必要である。

学習指導要領には**「思考力・判断力・表現力等」**の具体的な内容として、「社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察する力、**社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想する力や考察したことや構想したことを説明する力・それらを基に議論する力**」とある。これらの力は、問題解決に向かう力であり、「よりよい社会を創造する」ために必要な資質・能力であると考える。

「思考力・判断力・表現力等」を高めるには、**社会的事象の見方・考え方**を働かせる必要がある。社会的事象の見方・考え方とは、「位置や空間の広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して（社会的事象の見方）、社会的事象を捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること（社会的事象の考え方）」である。それらを用いて、社会的事象について**調べ、考えたり、選択・判断したり**していく。そして、話合い活動などを通して問題解決を繰り返していくことで、「思考力・判断力・表現力等」を高め、**より多角的で広い視野に立った「選択・判断」**に至ることができる。概念的知識を形成し「どちらがよいか」「どうしたらよいか」など**概念的知識に「社会をよりよくすることに資する自分なりの価値観」を加えたもの**へと発展させていくことができると考える。選挙年齢と成年年齢が18歳に引き下

げられた現在、このような力の育成が小学校段階から求められている。

社会科で育てる**「社会参画意識」**とは、よりよい社会にしていくために、社会的事象について自分なりの考えをもち、他者と交流しながら、**「価値判断」**や**「意思決定」**をしようとすることである。

「価値判断」とは、「社会的事象について、様々な情報を分析し、自分なりの意見を表現すること」である。「価値判断」を行うためには、まず、学習の中で他の児童との価値の相違に気付き、議論を通して、他者の意見を参考にしたり、批判的に考えたりしながら、自らの生活との関連を基に自分なりの価値観を形成していく。そして、形成された**価値観**を基に、社会的事象に対して、自分たちにとって「大切か」「必要か」などを決めていく。

「意思決定」とは、「社会問題の解決策について、よりよい社会の形成にむけて**自分や集団の意思**や行動を表明すること」である。他者の**価値観**や立場を踏まえて、対立する内容を理解し、整理したり、折り合いを付けたりして、問題を解決しようとすることが必要となる。

学習指導要領解説社会科編では、「選択・判断」とは、「社会的事象の仕組みや働きを学んだ上で、習得した知識などの中から自分たちに協力できることなどを選び出し、自分の意見や考えとして決めるなどして、判断すること」と解説している。本大会では社会参画意識を具現化するため、「選択」する際の根拠となる、**価値観や自分や集団の意思**を基に、「価値判断」「意思決定」を重視することとした。

社会的事象に対して「価値判断」「意思決定」をすることで**価値観が加わった概念的知識**を形成する中で、児童は社会的事象への考え方が深まり、このような学習の中で**「よりよい社会を形成していこうとする思いや考え」**を育てていくことができる。

以上のことから「思考力・判断力・表現力等」を高めることは、より多角的で広い視野に立った「価値判断」「意思決定」を促し、「よりよい社会の創造」に向けて必要な社会参画意識の基盤となる。

Ⅳ 目指す児童像

3つの「資質・能力」に即して、大会主題にある「よりよい社会を創造する児童」の姿を整理すると次のようになる。

【 知 識 及 び 技 能 】〇社会の問題を見いだし、社会的事象の特色や意味を理解する児童

【思考力・判断力・表現力等】〇自分の考えを基に複数の立場や意見をふまえて多角的に考える児童

【学びに向かう力人間性等】〇自分達の生活する社会に愛情をもち、よりよい社会をつくろうとする児童

Ⅴ 研究の視点について

研究主題に迫るために**「教材開発の工夫」「学習過程の構想」「評価の在り方と指導の工夫」**の3つの視点を基に研究を進めていく。

視点１ 教材開発の工夫

重点 「社会参画意識」を育てるための教材の観点と組み合わせの工夫

「社会参画意識」を向上させていくためには、社会的事象とのつながりを感じたり、自分なりの考えをもったりすることのできる「教材開発」が有効であると考える。なぜなら、児童自らが社会的事象とのつながりを感じなければ、自分事として考えた上での「価値判断」や「意思決定」にならないからである。教材開発の工夫をする上で、（1）教材を大きく3つの観点に整理すること、（2）3つの観点を組み合わせて単元設計することに重点をおき「社会参画意識」の育成を目指す。

（1）教材の3つの観点

① 「学校や地域の特色を生かした教材」 **② 「生活体験を生かした教材」**	児童が社会的事象とのつながりを感じ社会的事象を捉えるための教材

③「社会の今日的な課題に対応した教材」	よりよい社会にしていくために、社会的事象について自分なりの考えをもち、他者と交流しながら、「価値判断」や「意思決定」をしようとするための教材

副主題にある「社会参画意識を育てる学習」を展開するにあたり、土台（児童が社会的事象とのつながりを感じ、社会的事象を捉えること）となる部分を学ぶ①「学校や地域の特色を生かした教材」②「生活体験を生かした教材」がある。そして、その上で③「社会の今日的な課題に対応した教材」を活用することで、児童がよりよい社会にしていくために、社会的事象について自分なりの考えをもち、他者と交流しながら「価値判断」や「意思決定」できると考えた。

以下、教材の3つの観点について詳述する。

① 「学校や地域の特色を生かした教材」

児童にとって、地域は日常生活の場であり、身近な存在である。地域にある素材を教材として扱うことで、児童が自ら課題をつかみ、地域の人々の生活や文化・産業等を調べるなど、意欲的に活動することができる。また、地域に学習活動の場を設けることや、地域の人材をゲストティーチャーとして積極的に活用していくことで、児童が地域社会について実感的に理解し、興味・関心をもって楽しく学習に取り組むことができる。

② 「生活体験を生かした教材」

児童の身の回りには、①と同様に、児童が社会的事象を実感的に捉えるために必要な素材がたくさん存在している。教室で学ぶだけでなく、そうした身近な素材を再認識させるだけで、児童は様々な社会的事象を自分事として実感的に捉えることができる。例えば、家庭でのごみの出し方やごみステーションの様子、家庭の冷蔵庫にある食材やスーパーでの買い物体験、自分が着ている服や持ち物（工業製品）、テレビで目にするニュース番組、地域住民の願いを基に税金によって造られた施設などである。こうした素材を教室での学習と関連付けていけるように、教師が問いかけたり、児童が家庭で調べたり、再発見したりすることで、社会的事象を実感的に捉え、理解を深めることができる。

③ 「社会の今日的な課題に対応した教材」

変化の激しい現代社会において、児童は様々な問題を自分なりに解決しながら生きていかなければならない。少子高齢化・環境問題など、今日的な課題に主体的に対応できる力を養うために社会科の果たすべき役割は大きい。また、国際情勢やエネルギー問題、物価の高騰など、児童が日頃から見聞きする世の中の課題についても、主体的に考えることができる児童の育成が必要であり、このことが「社会参画意識の高まり」に直結する要素である。そのため、これらの課題に対応した教材を開発していくことが必要となってくる。各単元の学習において、多くの場合、社会的事象の課題と解決に向けた取組が扱われる。しかし、この「解決に向けた取組」の例が少ないのが実情である。そこで、教師がこの点を補うための教材開発を行い、児童に提示することで、よりよい社会にしていくための自分なりの考えをもち、他者との交流を通して「価値判断」「意思決定」できるようにしていく。

（2）3つの教材群を活用した展開

上記の3つの教材群をどのように組み合わせて単元設計をしていけばよいか。大きく、以下の2つのパターンが考えられる。

	パターン1	主な学習内容	パターン2
つかむ	教科書の事例 生活体験を生かした教材	**○学習問題①の設定** ・学習問題に対する予想をして見通しをもつ ・学習計画の設定	学校や地域の特色を生かした教材 生活体験を生かした教材
追究する		**○問題解決のための追究** ・調べる、整理する ・交流する ・学習問題①について自分の考えをもつ	
まとめる・いかす	社会の今日的な課題に対応した教材	**○学習問題①のまとめ** **○学習問題②の設定** ・学習問題②について自分の考えをもつ ・先進的な取組を知り、今日的な課題に対する自分なりの考えをもつ **○「価値判断」「意思決定」する**	社会の今日的な課題に対応した教材

パターン1では、教科書の事例での学びを基本としながら、生活体験を生かした教材を適宜活用し、単元の終盤で「社会の今日的な課題に対応した教材」を活用することで、社会参画意識を高めていく。例として5年「自動車をつくる工業」を挙げる。教科書や資料集、情報サイトを活用して、自動車生産の工程や関連工場との協力、製品の輸送や価格などについて調べるとともに、並行して「生活体験を生かした教材」として、実際に教師の車や家庭にある車を見て、パーツの種類や数を調べたり、車のつくりについて再発見したりできる機会を設けた。また、単元の後半では「社会の今日的な課題に対応した教材」として、様々な社会的な要望や人々の願いを実現するための自動車開発を扱い、「これからは、どのような自動車が開発されるとよいか」という学習問題②を設定し、児童がよりよい社会を実現するためのオリジナル自動車について考

えた。

パターン2では、単元全体を通して、教科書の事例ではなく、「学校や地域の特色を生かした教材」を通して学んでいく。群馬県では、3，4年生の学習において地域教材を取り上げた副読本を主たる教材本として活用している。例えば、4年「わたしたちのくらしとごみ」の学習では、副読本「のびゆく高崎」を活用し、ごみの処理の仕方について、高崎市の「ごみかわら版」（処分方法の一覧）や身近なごみステーションの様子などから具体的に学んでいく。並行して、高浜クリーンセンター（ごみ処理施設）への社会科見学を通して、ごみの焼却や資源物の再利用についても具体的に学ぶ。そして、単元の終末では「社会の今日的な課題に対応した教材」として、ごみの焼却の際に出される「熱」や「灰」がエネルギーとして活用されていることを学び、持続可能なごみ処理について考えた。

視点２ 学習過程の構想

重点 考えを深める学習問題②の設定

「社会参画意識」を向上させていくためには、「価値判断」や「意思決定」につながる問いを設ける「学習過程の構想」が有効であると考える。なぜなら、児童は問いの設定によって「社会的事象の見方・考え方」を用いて社会的事象について調べ、考えたり、「価値判断」「意思決定」したりしていくからである。学習過程を構想する上で、１つの学習単元に2つの学習問題を設定し、児童の考えを深めることに重点を置き、より多角的で広い視野に立った「価値判断」「意思決定」に至ることで「社会参画意識」の育成を目指す。

社会科の基本的な単元構成は、最初に学習問題①を設定し、その解決に向かう過程で、児童は見方・考え方を働かせたり、交流したりする。これにより、「知識及び技能」を身に付けたり、「思考力・判断力・表現力等」を高めたりすることができる。

次に、「思考力・判断力・表現力等」をさらに高める手立てとして、**単元の中に学習問題②を設ける**ことで、児童が自分なりに考えを深め、**「価値判断・意思決定を必要とする活動」や「まとめる、広げる活動」**につなげ、概念的知識に「社会をよりよくすることに資する自分なりの価値観」を加えたものへと発展させていく。

学習問題①とは？（集めた事実から、概念的知識を獲得する学習問題）
学習の方向付けとなる単元全体に関わる問い。学習の方向付けとなる。

＋

学習問題②とは？（「価値判断」や「意思決定」を問う学習問題）【考えを深める問い】
「自分」「地域社会や国」などを主語にした、児童自身がより深く関わる問い。

(１)学習問題②を設定するための方法

考えを深める学習問題②を設定するためには、「キーワード」を基にした問いによって一単元の授業を構想し、「価値判断」「意思決定」に至るまでの思考の流れを明確にすることが必要である。

つかむ過程

見通しをもつ

社会の抱えている問題を把握する問い【学習問題①】
教材との出合い、気付きや疑問を基に学習問題を作ったり、学習計画を立てたりしていく。
どのように～しているのだろうか？（何が起きているのかを知るための問い）

追究する過程

話し合う
調べる

追究につなげる問い【調べるための視点】
学習問題①を作り上げた際の疑問や調べたいことを基に、学習計画を進めていく。
どのようなことをしているのか。（社会の仕組みを知るための問い）
なぜ、～が必要なのか？（社会の仕組みの意味・価値を学ぶための問い）

まとめる・いかす過程

説明する・書く
選ぶ・決める

「価値判断」や「意思決定」につながる問い【学習問題②】
自分と社会とのつながりを意識したり、自分自身の考えを広げたり、深めたりする。
どちらがよいか？ ～をするべきか？ 本当に～なのか？
これからは、どんなことができるのか？

(2)考えを深める学習問題②を設定した実践例
3年生「火事からくらしを守る」
学習問題①「火事からわたしたちのくらしを守るため、だれがどのようなはたらきをしているのだろう」
学習問題②「自分たちはどのようなことができるだろう」

4年生「自然災害からくらしを守る」
学習問題①「水害から暮らしを守る方法を考えよう」
学習問題②「自然災害からくらしを守るため、わたしたちにできることを考えよう」

5年生「情報を生かす産業」
学習問題①「タクシー会社では、様々な人々のくらしの充実のために、どのように情報を活用しているのだろう」
学習問題②「AI が世の中に広がっていくことは、本当によいことなのだろうか」

6年生「新しい日本　平和な日本へ」
学習問題①「戦争が終わってから、日本はどのような国になったのだろう」
学習問題②「これからの日本はどのような国にしていけばよいのだろう」

視点３　評価の在り方と指導の工夫

重点 振り返りの充実

「社会参画意識」を向上させていくためには、「評価の在り方と指導の工夫」が有効であると考える。なぜなら、児童が社会的事象への考え方を深め、学習の中で「よりよい社会を形成していこうとする思いや考え」を育てていくためには、それらを見取り、指導と評価を一体的に進めることが必要だからである。**よりよい社会を形成していこうとする思いや考え**を見取るための**振り返り**を充実させることに重点を置き、「社会参画意識」の育成を目指す。

教師は児童の学習状況を評価し、その結果を児童の学習や教師による指導の改善、さらに学校全体としての教育課程の改善などに生かしており、学校全体として組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っている。「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹に当たるものである。

指導と評価の一体化を図るには、児童一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくことが大切である。すなわち、学習指導要領で重視している「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通して、資質・能力を確実に育成する上で、学習評価は重要な役割を担っている。

評価の基本的な流れとしては、単元の目標に応じて評価規準を設定し、評価場面や評価方法を決め、観点ごとに評価を行う。その際、児童の発言や記述などから評価を行うが、児童の記述には、評価の観点が混在しており、判別が難しいこともある。例えば5年「水産業のさかんな地域」の学習において、学習問題①「水産業にかかわっている人々は、どのように魚をとったり、加工したりして、消費者にとどけているのでしょうか」を設定する。まとめる・いかす過程で、鰹節の生産工程について「骨ぬきを手作業で行ってくれているおかげで、消費者も安心して食べることができるので、そうした人に感謝しながら鰹節を食べたい。」という記述がみられた。この児童の記述は、生産の工程に着目し、食料生産に関わる人々の工夫や努力を捉え、考えたことを表現している、という点から「思考・判断・表現」として評価することができる。一方で、自分と社会とのつながりを見いだしている、という点から「主体的に学習に取り組む態度」として評価することもできる。教師は指導計画に基づいて、この場面ではどの観点で評価するのか明確にしておく必要がある。

本大会で目指している「社会参画意識」の育成のための評価については、「思考・判断・表現」との関連性も踏まえながら、「主体的に学習に取り組む態度」として捉えることとした。①「社会的事象について、予想や学習計画を立て、学習を振り返ったり見直したりして、学習問題を追究・解決しようとしているか」②「よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとしているか」という学習状況を見取り、評価規準を作成する。

「価値判断」「意思決定」の内容については「思考・判断・表現」の評価として捉えることとした。社会参画意識の形成につながる大切な要素として見取っていく。①「社会的事象に着目して、問いを見いだし、社会的事象の様子について考え表現しているか」②「比較・関連付け、総合などして社会的事象の特色や意味を考えたり、学習したことを基に社会への関わり方を「選択・判断」したりして、適切に表現しているか」という学習状況を見取り、評価規準を作成する。

「社会参画意識」は、社会に見られる課題を把握して社会への関わり方を「価値判断」「意思決定」したり、多角的に考えて社会の発展について自分の考えをまとめたりする学習場面で表出されることが多いことが考えられるため、**「思考・判断・表現」との関連性を踏まえて評価規準を設定する**ことが大切である。

それぞれの評価方法としては、児童の「**振り返り**」を用いることが欠かせない。その理由は2つある。一つ目は、「主体的に学習に取り組む態度」の評価として、児童が粘り強い取組を行おうとする側面や粘り強い取組を行う中で自らの学習を調整しようとする側面を見取ることができるからである。振り返る際には、「何を学んだのか」「どのように学んだのか」など観点を定め、児童が自分の学びを自覚できるようにする必要がある。

二つ目は、「思考・判断・表現」の評価として、獲得した知識を基に考えたことなどを蓄積し、単元を通して学習問題についての考えを深めてきたことを見取ることができるからである。振り返りで見取ったことを指導に生かし、資質・能力を往還的に育みながら、よりよい社会を形成していこうとする思いや考えの質を高めていく。

（1）振り返る内容と場面

「よりよい社会を形成していこうとする思いや考え」を授業の中で児童が表現できるようにするには、自分の学びを振り返ることが重要であると考える。

児童自身が学習活動を振り返り、自身の考えをまとめたり、成長を自覚したり、学んだ成果を共有したりすることが重要である。振り返りについては、何を振り返るのかを明確にして単元に設定する必要がある。例えば、本時で学んだことの振り返り（本時の学び・本時の問いに対するもの）や単元の学習問題の振り返り（単元を通して追究してきた問題に対するもの）などが挙げられる。そして、単元のまとめる・いかす過程では、主語が「地域の人々は」や「〇〇市は」でなく、児童一人一人の学びの振り返りになるため「私は」となる。また、振り返りによって新たな疑問や課題が生まれることも大切なことである。この新たな疑問や課題が次の学習に向けた「学びに向かう力」に結び付いていく。

単元の振り返りの記述例　4年「水害からくらしを守る」

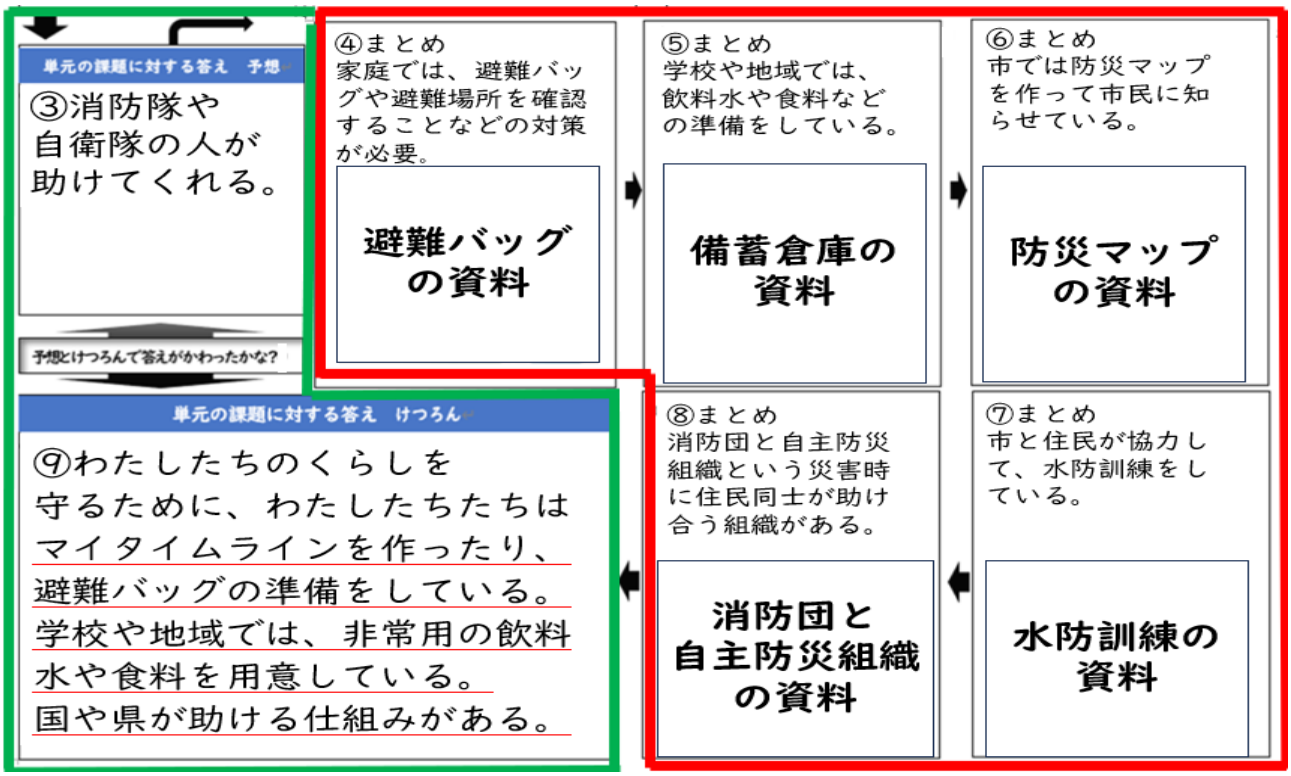
・わたしは、最初、自衛隊の人や消防士さんが助けてくれるのかと思っていたけれど、この学習をして住民や市の人、県なども協力をしていることが分かりました。これからも災害に備えて避難バッグや避難グッズを準備して、災害になっても困らないようにしたいです。

・ぼくは、水害からくらしを守るために地域の人たちと協力していることが分かりました。避難用バッグや非常食を準備していなかったから、水害になっても大丈夫なようにしたいです。

（2）よりよい社会を形成していこうとする思いや考えを見取るための振り返りの実践例

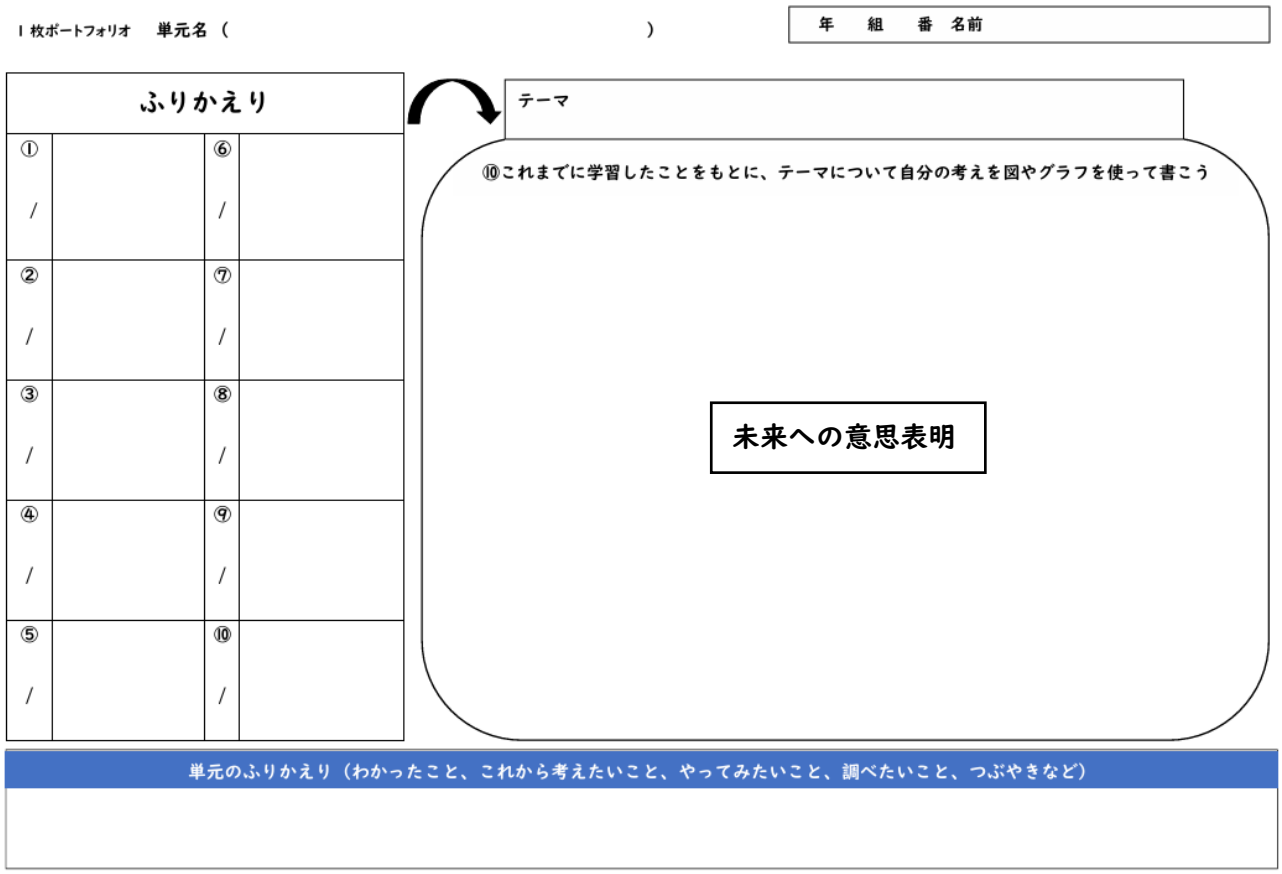
①視覚的資料を用いた1枚ポートフォリオ

一単位時間のまとめには、文章だけだと児童が分かりにくさを感じることがあるため、視覚的資料を用いながら１枚ポートフォリオに蓄積していく方法がある。学習問題①に対する予想と毎時間のめあてとまとめ、自分の考え、今日学んだことを蓄積していくことは、学習内容を俯瞰することにつながる。それらを活用することで、学習問題の振り返りを考えることができる。単元の結論をまとめた後、予想の段階では考えられなかったキーワードを見付け、アンダーラインを引くなどして可視化することで（図1）、単元の振り返りを書く際、児童は自らの考えを調整できたことに気付くことができる。



＜図１　視覚的資料を用いた１枚ポートフォリオ　4年「水害からくらしを守る」＞

「まとめる・いかす」過程では、これまでに学んだことを自分の生活に生かすための「未来への意思表明」を文章や図、グラフを用いて表現することで、「思考力・判断力・表現力等」の育成へとつなげていくことができる。（図2）



＜図２　１枚ポートフォリオによる振り返り＞

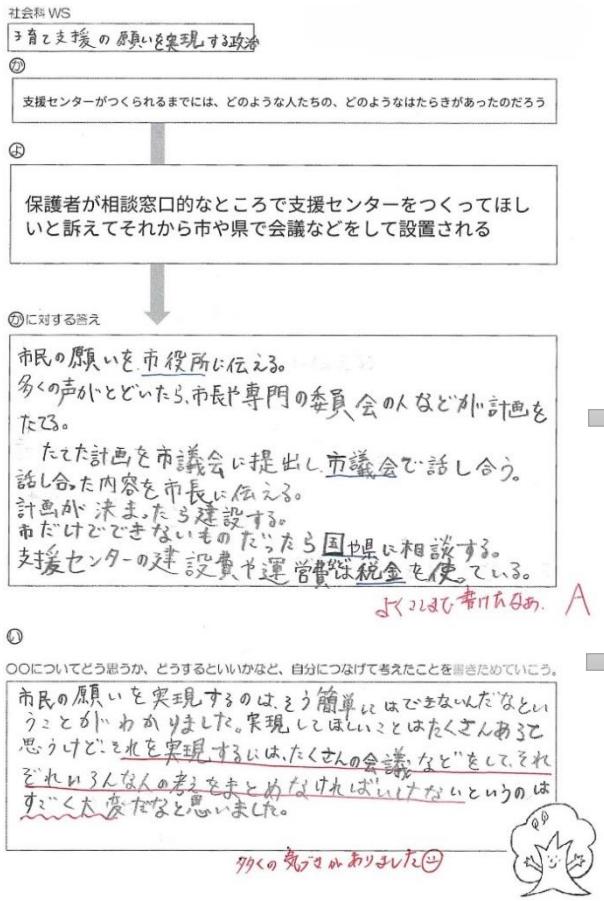
②ロジックを見取る「ワークシート」とエモーションを見取る「学び方シート」

児童が表現した内容によっては、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」を区別しにくいことがある。そこで、前者ではロジック（論理）、後者ではエモーション（情意）を中心に見取ることで、指導と評価の一体化を図る。

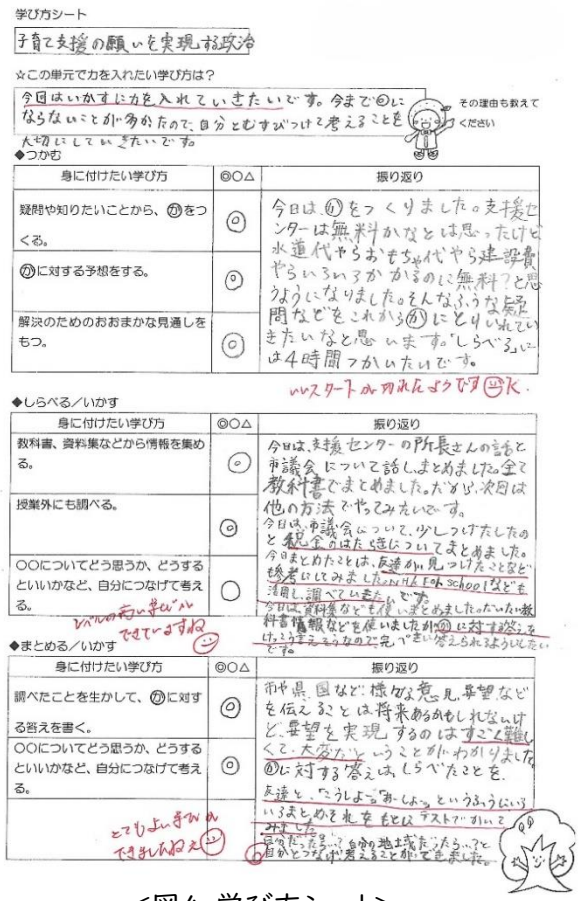
ワークシート（図3）は、学習問題①に対する予想、学習問題①に対する答え、自分の生活とつなげて考えたことなどから、ロジックを中心に見取ることができる。年間を通して、学習問題に対する答えを文字言語で記述させるパフォーマンステストを継続することは、「思考力・判断力・表現力等」の育成につながる。本シートは、「思考・判断・表現」の評価材料の一つとして活用することができる。

学び方シート（図4）は、つかむ、追究する、まとめる・いかすの各過程における自分の学び方をモニタリングしたりコントロールしたりするためのもので、エモーションを中心に見取ることができる。振り返りは、学習過程の節目に行われ、「主体的に学習に取り組む態度」の評価材料の一つとして活用することができる。

「価値判断」や「意思決定」をしようとする「社会参画意識」を育成するためには、「身に付けたい学び方」に設定した「〇〇についてどう思うか、どうするといいかなど、自分につなげて考える」視点をもち続けることが大切である。



＜図3 ワークシート＞



＜図4 学び方シート＞

<参考文献>

岩田一彦.「社会科固有の授業理論・30」の提言：総合的学習との関係を明確にする視点.明治図書.2001.
小原友行.“社会科における意思決定”.社会認識教育学会編「社会科教育ハンドブック-新しい視座への基礎知識-」.明治図書.1994,p.167-176.
群馬県教育委員会義務教育課 報道提供資料.“令和5年度全国学力・学習状況調査結果分析資料”.2023-8.
中央教育審議会.“幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び方策等について（答申）”.文部科学省.2016-12-21.
泉長顕.“考える社会科をどう創るか”.明星大学教職センター年報第3号,明星大学教職センター,2013,p1-12.
群馬県教育委員会.“はばたく群馬の指導プラン”.2012.
群馬県教育委員会.“群馬県教育ビジョン(第４期群馬県教育振興基本計画)”.2024
中央教育審議会.“「令和の日本型学校教育」の構築を目指して”.文部科学省.2021-1-26.
中央教育審議会.“次期教育振興基本計画について”.文部科学省.2023-3-8.
文部科学省.“小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編”.東洋館出版社,2018-2-28
椿倉大裕・須本良夫“社会的価値判断・意思決定の力を育む社会科学習：TPP について価値判断し、これからの食料生産について意思決定する子の姿をめざして.岐阜大学教育学部教師教育研究,2016-12.
澤井陽介.“できる評価・続けられる評価”.東洋館出版社,2022.
小倉勝登.“社会科における資質・能力の育成に向けた授業づくり”. 教育セミナー研究紀要24 巻1号.一般財団法人 総合初等教育研究所,2021,p.18-21.
堀哲夫.“OPPA の基本的骨子と理論的背景の関係に関する研究”.山梨大学教育人間科学部紀要.2011.p94-107.
堀哲夫監修/中島雅子編著“一枚ポートフォリオ評価論 OPPA でつくる授業”.東洋館出版社,2022.
国立教育政策研究所教育課程研究センター.“指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料”.2020-3